１１号の発刊にことよせて

― 退官の挨拶 ―

渡　辺　　光

「お茶の水地理」も昨年までに１０号を数えるまでに成長した。いままで本誌の経て来た歩みを辿って見ると，はじめの発刊の動機は極めてささやかなもので，次の二つを中心目標としたものであったように覚えている。一つは，毎年出て行かれる卒業生の労作である卒論が，一部教室に保存されて，限られた後輩に利用されるだけであるのを遺憾とし，せめてその梗概だけでも印刷に付して一般の利用に供する機関とし度いということであり，いま一つは，併せて，在来とかく同期生だけの横のつながりに限られ勝ちであった卒業生の全体の相互連絡の手段とし度いということであった。

幸にこの二つの目的は十分に達成されたようであり，なお，号を重ねるに従って内容の方も充実し，特に第８巻あたりからは，諸姉の熱意によって，学術刊行物としての性格を付与させるまでになった。

つぎに，私事に亘ることではあるが，この１１号の刊行と前後して，私は１１年９ヶ月のお茶の水女子大学の生活とお別れすることになる。世間並に云えば定年退職である。この長い間を暖かく包擁して下さった地理学教室，惹いてはお茶の水女子大学の諸氏に対して厚く感謝する次第である。ただ私は，純粋の学徒として，同一乃至類似の職場に終始した多くの先輩の先生方とは少し違った職歴を経て来たので，職を去るに当っての感慨にも少し異なるものがあるようである。有り体に云えば，生涯の大きな転機を迎えると云うような感じはない。

少しく御年配の方は知っておられることと思うが，私は昭和3年に世の中に出てから，１０年前後で公職を変えている。はじめの５年間は東大の地理学教室の副手をし，かたわら日本大学で講義をしたり，ミシガン大学のフェローになったりしていた。実はこの時代が私にとって本当の学生時代であって，日大での講義担当（地形学，陸水学，経済地理学，欧州地誌，西米地誌）が私の学習の機会であった。当時の学生諸氏には迷惑この上もなかったろうが，私にとっては地理学習のまたとない機会であって，この意味に於て，日大こそ私の地理学の母校であるわけである。

その後は，ほぼ１０年前後を周期として職を変えて来た。それも単なる転任や昇任ではなく，仕事の性格がガラリと変った転任であった。昭和８年から１１年までは陸軍士官学校（後に予科士官学校）で地学（地理を中心とし，天文，地質を含む）を講じ，２１年までは文部省図書監修官として，師範学校（現在の教育大学に相当）の地理の教科書編修，２１年から３３年までは内務省地理調査所―後の建設省国土地理院―の企画課長から地図部長の職にあって，毎日沢山の判を押していた。これらの間に於ては，本学で享けたと同様の御厚情を先輩・同僚から戴いたことは，今以て有難いことだと思っている。それのみか，どの場合も，転任後も公私共に余波がつづいたので，離任というような感慨はあまりなかった。陸士の場合には，文部省に残ってからも，戦時中であったので，屢ば赴いて，かっての同僚の教官

と共に国防に参画し，また太平洋協会の仕事を通して，末広厳太郎，和田清（本学和田教授御尊父）多田文男，平野義太郎その他多くの社会科学方面の諸氏と共に時局の分析等を行った。

文部省時代も昭和２１年で終ったのではなく，２５年まで兼任していた。そこで内務技官兼文部事務官というおかしな肩書を持っていたのである。国土地理院時代の名残は未だにつづいており，私の在任中にはじめた土地利用，地形分類その他のトピカルマップは，この頃その後の方々の努力でようやくルーテンにのっている。

お茶の水の場合には，前までと違い，停年退職であるから，今後は公の関係は断たれるわけであるが，私も学徒としての生活はここ数年はつづけざるを得ないわけであるから，今までと同様，御指導，御鞭撻を願い度い。